キミの微笑とボクの憂鬱

浅島　護

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キミの微笑とボクの憂鬱

【Ｎコード】

Ｎ２１６９Ｃ

【作者名】

浅島　護

【あらすじ】

主人公のアルとその仲間たちが繰り広げるお話・・・？

プロローグ（前書き）

多少グロテスクな表現があるかもしれません^^;

プロローグ

「お兄ちゃん、お兄ちゃん！」
シェイルが長い黒髪をなびかせて走ってきた。
「ん？どうかした？」
やる気のあるような無いようなふにゃふにゃ声でアルは振り返る。
「もう…ちょっと、こっち来て！」
こちらは怒っているような嬉しいような何ともいえない表情。シェイルに手を引かれ、たどり着いた場所は綺麗な花畑だった。あまりの綺麗さに驚いてポカンと口を開けているアルを尻目に、シェイルはニコニコ笑った。
「どう？すごいでしょ、おにいちゃん」
「わぁ…すごいなぁ、よく見つけたね」
エヘンと、咳払いをしてシェイルは胸を張ってみせた。
「お兄ちゃんと違って、へなへなじゃないもん！」
「へなへなで悪かったなぁ…」
少しへこむ兄を押しながら寝転がした。
「まぁまぁ、それがお兄ちゃんらしくていいんだけどね」
シェイルも隣に寝転び、お昼寝タイムとなった。
アルが目覚めたのは夕方だった。シェイルはとっくに起きて兄を揺すっている。
「お兄ちゃん、お兄ちゃん…そろそろ帰ろ？」
ようやく起き上がり、二人は手をつないでもと来た道を戻った。
「今日も楽しかったねぇ」
「うん！やっとお兄ちゃんにあのお花畑見てもらえたし…今度は何見たい？」
見つめるお互いの顔は笑顔と希望に溢れかえっていた。しかし次の瞬間、その顔が恐怖の色に染められていった。
「お、お兄ちゃん…あれ」

ようやく森を抜けていつもの村に帰ったはずだったが、様子が違った。家々が燃え、至る所に血が飛び散っていた。
「に、逃げなくちゃ！」
「で、でもお母さんが…」
尻込みをするシェイルを無理矢理引っ張ろうとするが、自分も足がすくんでうまく歩けない。
「…何をしている」
振り返ると真っ黒な服に真っ黒なフードを被った人がいた。声や背格好からして男の人だろう。手には血塗られ、異様な形をした剣が。
「え…あ…」
パクパク口をしているうちにも男は近づいてくる。目の前まで来ると男は二人に剣先を向ける。シェイルに向けていると、刀身が青白く光り始めた。
「お前か…こいつは俺が貰うぞ」
男はシェイルの腕を掴んでそのまま歩き去ってしまった。連れ戻したいがあまりの威圧感に何もできなかった。言葉も発せないまま呆然とシェイルが連れ去られていくのを見るしかできなかった。
「おにいちゃぁ～～ん！！！」
泣き叫ぶシェイルが徐々に遠ざかっていく。それにつれて自分の意識も遠のいてしまった。

プロローグ（後書き）

えっと、ようやく書き始めました^^；やっぱりまだまだですね←
←これからもっとがんばりますっ！　題名は適当なのでもし良いのが見つかったら変更するかもです・・・ではっまた今度！

第一話：眠れぬ夜

「・・・はぁ」
アルが起きたのは、まだ満月が真上に昇っている頃だった。別に用事があるわけではないが、最近見る夢で目が覚めてしまう。あれは夢なのだろうか、古く、幼い頃の記憶が寝ている間に蘇ってきているのかもしれない。
『あれから１２年かぁ・・・』
あの出来事を思い返すたびに、今でも胸が締め付けられるような気がする。しかし、彼にとってそれは少し嬉しいことでもあった。なぜなら今でも彼女のことをあきらめていないという証拠なのだから・・・。
『シェイル・・・』
月に向かい、胸の中でその名を呼ぶ。今頃どうしているのだろうか・・・。
今度は部屋を見回してみた。こざっぱりとして、独り暮らしには充分の部屋だ。さっきの事は夢だったが、こちらはどうも夢ではないらしい。
『・・・ふぅ』
昨日の昼、ようやくアルは『暁』と言うギルドに入ることができた。ここはそこの宿舎である。ギルドとは、簡単なことから普通の人にはできそうのない大事な仕事を請負う・・・平たく言うと『何でも屋』を指している。その中でも暁は、この『クレンシア王国』の中でもかなりの老舗である。
「眠れない・・・」
昨日の今日だから仕方がない。しかも明日から普通に仕事をこなしていかなければ。その緊張から、否が応でも目が覚めてしまう。
『ん～・・・思い切って外に出てみようかな。別に夜中外出てもいいみたいだし』

寝間着に上着を羽織る。いくら暖かくなってきたとはいえ、やはり夜は寒い。準備が終了して、いざ出発！
宿舎は充分に明かりが燈されていた。明るいのはいいのだが、ここはやたらと通路が多く迷ってしまうと一筋縄では戻れなさそうだ。
それを示しているかのように、
『迷子の方はこのレバーを引いてください』
と言う不思議な看板が至る所に設置されている。できればお世話になりたくない。走行しているうちに、やっとのことで中庭に出ることができる『扉』・・・ではなく『台』があった。正式名称『空間転移装置』。これはどういう原理なのか知らないが（たぶん魔法でできている）、ともかく表示されている場所まで送ってくれる優れものらしい。
『・・・』
手前でアルの動きが止まってしまった。アルはどうもこれが苦手らしい。
『これ・・・頭が痛くなるよぉ・・・』
怖気づいて数分動けなくなっていると、後ろから声がかかった。
「君、どうかしたかい？」
振り返ると、声の通りに優しそうな紺色の髪をしたお兄さんが立っている。
「あ、あはは・・・」
嬉しさのあまりにぎこちない笑いとなってしまった。その変な顔にも臆せずお兄さんは続ける。
「あぁ～・・・君、『ワープ』苦手かい？」
「は、はい」
そう言うとお兄さんは愉快そうに笑う。
「ははは、はじめての人にはこれが苦手って言う人も少なくないから仕方ないよ。そうだ・・・他の道を案内しようか？」
アルはお兄さんの優しさに感動した。アルはお兄さんに導かれて階段を降りていった。

「あ・・・ありがとうございますっ！あ、あのボク・・・昨日ここに来たばかりで・・・」
「そうかそうか、それは大変だね。・・・やっぱり眠れないかい？」
「はい・・・明日からのこと考えると緊張しっぱなしで・・・」
そうこうしている内に二人は中庭へ着いた。
「まぁ、これだけは言えるかな。『無理せずに自分のできる範囲のことをしろ』危ない目に会うのは辛いからね、慣れてきたら徐々に上のランクに挑戦すればいいし」
「ふむふむ・・・あ、ここの仕事ってどういう風にすればいいんですか？」
こんな素朴な疑問にもお兄さんは真剣に考えてくれる。
「ん～・・・そうだな。明日多分教えてくれるかもしれないけど、まずはカウンターで自分がやりたい仕事をきめるんだ。ただし、自分のランクよりうえの仕事。自分に不向きな仕事はやらないことだ。もし、特にこれと言ってやりたい仕事がなければ受付の子に言って決めてもらうのも悪くない。んでもって、仕事を請負ってからその依頼者のところまで行って仕事の確認をするんだ。そこから仕事開始。終わってから依頼者にもう一度会って報酬を貰いここへ帰る。そしてカウンターで結果の報告っと・・・大体の流れはわかったかい？」
アルはそれを一言残さずメモした。
「ありがとうございます、これで明日も何とかいけそうです」
「そうかい、それはよかったよ。・・・それじゃあ、私からも質問いいかな？」
突然の質問に少し戸惑ったが、さっきの御礼も含めて答えるようにした。
「質問って・・・なんですか？」
「・・・どうしてここに入ろうと思ったんだい？」
この質問に答えるのは少し時間がかかった。
「あの・・・お兄さんは１２年前のクレーヌの村で起こった事件知

ってますか？」
「あぁ、たしか村人が惨殺されたって話か・・・」
「はい、ボクは・・・その村の生き残りなんです」
突然の告白に驚きを隠せなかったが、お兄さんは推測を言ってみた。
「・・・敵討ちかい？」
「いえ・・・その時、僕の妹が犯人に連れ去られたんです。だから妹を見つけたいんです」
さっきまでへなへなな感じが漂っていたアルだが、このときばかりは真剣だ。
「そうか・・・悪かったね」
「いえいえ、もう慣れましたから」
「・・・いつか見つかるといいな」
そのまま二人はベンチからこの中庭名物の巨大桜を眺めていた。しばらくすると、玄関ホール辺りから誰かが手を振っている。
「あ・・・そうだった。悪いけどそろそろお暇させてもらうよ」
「ありがとうございました！・・・またお話ができると嬉しいです」
お兄さんは立ち上がる際にこちらに向き直った。
「君の名前は？」
「ボクはアル。アル・フリーウェルです」
「そうか、私の名前はジン。ジン・グローウェルだ、君に逢えて嬉しいよ」
その名を聞いてアルはたちまち固まってしまった。ジンが手を出して無意識のうちに握手を交わす。
「それじゃあまた今度！」
そう言って彼は走り去ってしまった。
『あ・・・あ、じ、ジン・クローウェルってここのスターじゃ・・・？』
いろいろな気持ちが入り混じり、少し興奮した状態でアルは部屋に戻ることにした。
『寝れなくてもいいからベッドに潜っておこう・・・』

明日はもっと緊張するかもしれない。

第一話：眠れぬ夜（後書き）

ようやく本編スタートです→→やたらと長くなってしまいました（汗）ごめんなさい←これからもがんばりますのでよろしくお願いしますっ！

第二話：あせらずゆっくりのんびりと（前書き）

お久しぶりですっ！（汗）久しぶりも更新です・・・サボってたわけじゃないから！

第二話：あせらずゆっくりのんびりと

―ジリリリリリリ・・・―
目覚ましの凄まじい音にアルは叩き起こされた。仕返しに軽い一撃、それでやつは動きを止めた。目覚ましといっても日の出と正午と日の入りと真夜中の４つしか指さない（これも魔法の力らしい）。つまりこの世界には基本と気に時間と言う概念はないのである。
「ふわぁ・・・」
窓の外を見てみると、そろそろ日の出が始まるころ。それに連れて町も徐々に動き始めていた。のそのそゆっくりとしたペースで着替えを済ませ、部屋を出た。
「えっと・・・ご飯は食堂だったよね・・・食堂、食堂・・・」
ふらふら歩いていると人が一方になだれ込んでいる。アルもつられて人ごみに紛れ込んだ。
「わぁ・・・」
数分後、たどり着いた先はとてつもなく大きなホールだった。テーブルにはさまざまな料理が。アルは隅のほうに腰を掛け、のんびりと食事を始めた。
「お、アル君じゃないか」
振り返ると、昨日出逢ったジン・クローウェルがいた。服が所々破れ、顔もどことなく疲れている様だが、口元には笑みをたたえている。
「じ、ジンさん！・・・だ、大丈夫ですか？」
「ははは・・・ちょっとばかりドジを踏んでしまってね。私もまだまだだなぁ」
ジンは一息ついてからテーブルに盛られてあるリンゴをかじりながら独り反省会を始めた。
「ん～・・・ダメだぁ、あれじゃ全然話にならないや・・・」
反省会ではなくて愚痴大会になっていた。

「ジンさんお疲れですね・・・どんな任務だったんですか？」
「んと、『夜間の鉱山開発』ってとこかな？ずっと穴掘りばっかりやってたよ・・・いやぁ、あれは危なかった。いい鉱脈を発見したんだけど突然天井が崩れちゃって、死ぬかと思った」
ジンは笑い飛ばしたが、アルは笑えそうにもない。どちらかと言うと混乱していた。そしてアルの中で一つの結果を導いた。
『この仕事って何でも出来なくちゃダメだなぁ』
「さぁて、そろそろ寝るかな。今日はもう疲れた」
「お疲れさまでした！」
そう言ってふらふら歩くジンを送った。ホントに大丈夫なのだろうか・・・。
―ピーンポーンパーンポーン―
何処からともなく館内放送が流れてきた。これも魔法の力らしい。
「新人生の方に連絡いたします、新人生に連絡いたします。ただいまより講座を行いますので中庭に集合してください」
朝食も終えたところなので、アルは中庭に向かうことにした。

第二話：あせらずゆっくりのんびりと（後書き）

（。－ω－）ハァ・・・ダメだこりゃ。やる気が全然わいてこない。『みんな！オラにやる気とネタを分けてくれ！！』（某サ〇ヤ人風）って叫んでみたいです。こんなオイラですがこれからもよろしくです・。・（つД`）・。・モダメポ

あ、あと、これからの更新を週一にしたいと思ってます。曜日は決まってません（ォィ）

それとも一つ、これからあとがきに登場人物の紹介や、色んなことを書こうかと・・・なので最後まで読んでくださいねぇ（。・ω・）（－ω－。）

ではっ！Ｓｅｅ　ｙｏｕ　ａｇａｉｎ！

第三話：初の任務は・・・（前書き）

どもです（「ー」；　ヒヤリ　まぁ、何ですねぇ・・・雨でじとじと、気が滅入るってもんです←
けどそこは気合と根性で・・・がんばるかもしれないです（何
祝読者数１００人越え！
∩（´∀｀∩）　ワッショーイ　ワッショ　∩（´∀｀　）∩　ョーイ　ワッショーイ　（∩´∀｀）∩
と言うことで（え？）登場人物でも紹介しようかと・・・もしかしたらその人にアタックするかも（（（（；゜Д゜））））
ではあとでがきでっ！＼（o（∇（　o）／

第三話：初の任務は・・・

たどり着いた中庭には十人くらいの集まりが出来ていた。どうやらそこが講座場所らしい。牛乳瓶の底みたいなメガネの人や、スキンヘッドの人、全身刺青の人などなど、全員が全員、代わった感じの雰囲気をかもし出している。

「ふむふむ・・・これでようやく集まったわい」

小さなメガネを掛けたおじいさんが腰を叩きながら大きな台へ上った。これでようやく目線を合わせることが出来る。

「えぇっと、集まってもらったお主らにはちょっとした講習を受けてもらうぞい。なぁに、ついちょちょいのちょいで終わるから」

いかにもおじいさんのような口調だ。

「では・・・まずは配るものがある。これを受け取れい！」

威勢のよい声とともに、何かを巻き上げた。全員それを手に取り、眺めた。どうやらバッチのようだ。大きな太陽と小さな月が示されている。

「それはのぉ・・・ここ『暁』のバッチじゃ。それが無いとここの者として認められなくなる。まぁ、証明書みたいなもんじゃの。じゃから大切に保管しておくことじゃ」

「あのぉ・・・質問してもいいですか？」

アルの隣にいた牛乳瓶の底みたいな大きなメガネを掛けた男の人が手をあげた。

「何じゃ？」

「えっと、このバッチ太陽が示されているのは分かるのですが、どうして月も？」

その質問におじいさんは少し考えた。

「・・・太陽だけじゃと寂しいじゃろ？それに暁の空には月も見えるしのぅ」

もっともらしい答えだったが何か隠しているようだった。まぁ、大

した意味はないだろうが。
「まぁ、さてさて・・・これからは基本的な説明をさせてもらおうかの」
それからの説明は昨日の晩にジンが教えてくれたものと同じだった。むしろジンが教えるほうが上手かったかも知れない。
ようやく講座が終わり、解散となった。そこからは誰が決めたわけでもないのに、全員玄関ホールへと向かった。
「うわぁ・・・」
アルは思わず声を洩らしてしまった。それくらい人がたくさんいるのだ。これだけ多い、と迷子になるのは危険極まりない。慎重に辺りに気を配りながら歩いていった。少しする、とそこだけなぜか人が少ないカウンターがあった。そこには受付嬢らしき緑髪でショートヘアの女の子が、一人座っていた。
「あんたたち・・・新人？」
それが彼女の第一声だった。受付嬢の割には態度が悪いがする。いかにも強そうなスキンヘッドの男が答えた。
「あぁ、それが？」
「別に・・・仕事するの？しないの？」
そう言われるとこちらの分が悪い。そそくさと列を作り始め、アルは順番を譲っていったので一番後となった。すぐに決める者がいれば、じっくり考えるものもいて、アルの順番がまわるまでに小一時間かかった。
「ふぅ・・・あなたが最後ね」
「おつかれさまです」
そう言うと少し不機嫌そうになった。
「仕方ないじゃない、仕事なんだから」
「す、すみません・・・」
「別に謝らなくてもいいってば」
何だかかなりご機嫌斜めだ。少々おびえながらも、じっくり書類を見始めた。

「えっと・・・『薬草集め』『要人護衛』『荷物運び』『庭の手入れ』『電球の取替え』・・・？」
「・・・で、何にするの？」
受付嬢はアルを見つめていた。あまりに見つめてくるので書類で顔を隠す。
「ん～・・・『ごみ収集』とか？」
「私に聞かれても・・・ちょっと見せなさい」
書類を奪われてしまった。受付嬢は机においてあったメガネをかけて、書類を読み始めた。
「なになに・・・『町の清掃活動』？・・・場所は・・・と、トラッシュタウン？！」
ひっくり返りそうなくらいのオーバーリアクションで彼女は驚いた。
「そんなにすごい所なんですか？？？」
「あ、あんたねぇ・・・トラッシュタウン知らないの？」
首を縦に振った。
「はぁ・・・トラッシュタウンはねぇ、ここから西へ行って、その先にある海の上にある島よ。ずぅっと昔の魔法機械のごみの山が溢れかえっていて、めちゃくちゃ臭いところ。ご飯もおいしくないし、ろくな物がないのにどうして住んでるのかしら・・・言い伝えだと、そこに巨大な魔法機械の研究施設があって、そこにはとんでもない発明がわんさかある・・・あくまでも言い伝えだけど」
一通り説明し、アルを見上げると、彼は燃え上がっていた。
「な、何・・・どうしたの？」
「そりゃあ・・・楽しそうじゃないですかぁ！そんなワクワクするところ、行ってみたいです！」
「あのねぇ・・・あんたいつ帰れるかわかんないのよ？」
その一言で燃え上がっていたものが急に消えた。
「え？・・・どうして？」
「だって、あんなゴミの町いくら掃除しても終わらなさそうだし・・・」

そんなこと言っている間に、アルは書類にサインをしてしまった。
「やってみないとわからないじゃないですか、それじゃあ！行ってきます！」
「あ・・・ちょ、ちょっと待ちなさいよ！！！」
寸前のところで首根っこを掴まれた。
「あなたそんなんじゃ命いくつあっても足んないよ・・・ちょっと待ってなさい」
そう言い残し、受付の人は奥の扉へ入ってしまった。数分後、彼女は両手に色んなものを抱えながら帰ってきた。
「ふぅ・・・これ全部もっていきなさい」
リュックサックに剣など、ごくごく普通のものはまだよかったが、まったく使い勝手がわからないものまでさまざまな物があった。
「こ、こんなにたくさん・・・持ちきれませんよぉ」
「仕方ない・・・じゃあこれだけでも持って行きなさい」
そう言って彼女は何やら小瓶をいくつか取り出してきた。
「これが、『解毒剤』でこっちが『中和剤』解毒剤は飲んで、中和剤は体中に振り掛けること！」
それらをアルに押し付けた。
「あ、ありがとう・・・ございます」
「勘違いしないでよねっ！仕事なんだから！！」
何故か頬を赤らめて彼女は言った。
「あ、あの・・・質問いいですか？」
「なに？」
「名前・・・」
「私？私は、アネル・グラン」
「ボクはアル・フリーウェルです、これからもよろしくお願いします！それじゃあ！」
そう言ってアルは走り去ってしまった。
「あ・・・がんばりなさいよ・・・」
最後のアネルの声は聞こえなかったかもしれない。

第三話：初の任務は・・・（後書き）

さぁ・・・とうとう来ちゃいましたね・・・あとがきです（わかっとるがな）
では・・・登場人物紹介こぉ～なぁ～
護「栄えある第一回目はこの人だっ！」
アル「どうもっ！アルですっ！」
護「いやぁ、とうとう出来ちゃったよこのコーナー」
アル「おめでとうです！」（パチパチ）
護「んで、今回はアルの自己紹介をお願いしますっ」
アル「そうでしたねぇ・・・歳は１９で、身長１７０の体重６５・・・」
護「ふむふむ・・・他には？」
アル「え・・・えっと、何だろ、趣味は・・・特にないです（汗）」
護「そ、そうかぁ・・・じゃあこれから見つかるようにがんばろう！」
アル「はいぃ・・・」
護「うん！・・・『キミの微笑とボクの憂鬱』出てみてどう？（ワクワク）」
アル「ん～・・・」
護「そこ考えちゃう？！（泣）」
アル「あ、泣かないでくださいぃ・・・まぁ、まぁまぁいいんじゃないですか？読者さんもたくさん見てくれてますし」
護「そうかぁ！よかったよかった！読者の皆さんに感謝感謝ですっ！」
護＋アル「ありがとうございますっ！」
護「それじゃあ今回はこれくらいで・・・」
アル「え！・・・もうちょっとでたかった←←」
護「ま、まぁまぁ・・・あとがきがこれ以上長くなるのもあれだし、

また今度で→→」
アル「それもそうですね！それじゃあ！」
まぁ、こんな感じで（？）終了です。長いですね・・・（滝汗）
じ、次回もこんな感じで（ぇ）ではっ！

第四話：ようやく出発・・・（前書き）

ふぅ・・・あぶねぇところだったぜ・・・まさかあそこまで苦しめられるとはなぁ・・・

と言うことで（え？）皆さん、歯は大切にしましょうねぇ！！！

ではっ！ごゆっくりぃ～（＊・ω・＊）

第四話：ようやく出発・・・

支度にほとんど時間はかからなかった。アルはスキップ気味にローカを走り、階段を駆け降りた。しかし、建物の入り口を出て立ち止まった。

「そう言えば・・・ここからどうすればよかったっけ？」

しばらくして、リュックの中から地図を取り出した。

「ん～・・・トラッシュタウン・・・は、ルウェル港から行かなくちゃいけないのか」

などと、独り言を言っていると前に誰か立っていた。

「やぁ、順調かい？」

見上げると、そこに立っていたのはさっきまでボロボロだったはずのジンだった。服も綺麗になっていて、顔色もよくなっている。

「あ！ジンさん！！体の方は大丈夫なんですか？」

「あぁ、おかげさまでね」

そう言って、昨日と同じ優しい笑顔を見せた。

「よかったです・・・けど、かなり早かったですね」

「え？まぁね、ちょっと友達に助けてもらったから」

「へぇ・・・」

治癒術だろうか、もしかするともっとすごいものがここにはたくさんあるかもしれない。

「あ、そうだそうだ・・・突然だけど、君と一緒に行くことにしたよ」

意味が分からなかった。ボケッとしていると、ジンは付け足した。

「ん～と、昨日の仕事のおかげでだいぶ時間が空いたから・・・まぁ、暇つぶしかな？アルのことも気になるし」

今度の笑顔は子供みたいな感じだ。ちょっと可愛い感じで、アルはドキッとしてしまった。

「あ・・・ありがとうございますっ！」

「うん、じゃあ・・・行こうか」
ジンの指差す方向に馬車があった。
「あれに・・・乗ってもいいんですか？」
こくり、とジンは頷いた。アルは何度も頭を下げた。
「いやいや、あれは私のものだから気にしなくてもいいよ」
二人は馬車に乗り込んだ。

町を出ると、辺りは一変して畑が広がった。春なので一面緑の野菜が広がっている。そんな景色を見ていると、ジンが声をかけてきた。
「ふぅ・・・この景色とは当分お別れだなぁ」
「・・・そんなにすごいところなんですか？」
うん、と頷くジン。
「少なくとも、私が行ったときは荒地で殺風景を具体化したようなところだったよ」
「そうなんだ・・・さっき受け付けの人に聞いたんですけど、本当だったんですね」
「受付の子・・・アネルかい？」
ジンが人を呼び捨てにするのは初めて聞いた。もっとも、アルの名前を呼んだところしか聞いていないのだが。
「はい、お知り合いですか？」
「あぁ、彼女とは古い付き合いだ・・・」
どこか昔を思い出しているような、そして愛おしむ感じの目をした。
「・・・港へはお昼ごろには着く。そこで忘れ物を補充できけど、忘れ物はないかい？」
そう言われて、とっさにリュックをあさるアル。
「ん～・・・ボクの中では大丈夫だと思うんですが」
「じゃあ、非常食は？ランタンとか・・・それ以前にお金持ってる？」
最初の品物から忘れていて、最後までには硬直していた。
「あははは・・・」

思わず苦笑してしまうアル。それを見てジンも少しだけ笑った。
「はは、まぁ誰にだってミスはあるよ。それに初任務だからね・・・
仕方ない、必要なものだけでも支払っておくよ」
「あ、ありがとうございますっ！」
狭い室内で頭を下げるのは危険だった。あと少しで頭をぶつけると
ころだ。
「まぁ、出世払でいいから」
何故かその一言は冗談に聞こえなかった。

第四話：ようやく出発・・・（後書き）

登場人物紹介こぉ～なぁ～

護「えっと・・・今回はこの方ですっ！」

ジン「やあ、よろしく」

護「こちらこそよろしくお願いしますっ、自己紹介をどうぞっ！」

ジン「ん～・・・名前はジン・クローウェル。歳が21で、身長が175の体重65・・・こんなものかな？」

護「ありがとうございますっ、んじゃあ・・・質問いいですか？」

ジン「もちろん、そのためのコーナーじゃなかったっけ？（笑）」

護「ははは・・・じゃあ、ジンさんは『暁』の言わばエース的存在ですが、これまでどんなことをされてきたんですか？」

ジン「ん～・・・色んなことをしてきたよ？鉱脈探したり、ジャングル探検したり、悪人退治とか・・・・・あとは失くし物探したりとか、ありとあらゆることを試してみたよ」

護「むふむふ・・・色んなことをやって色んなことを学ばれてきたんですね」

ジン「まぁ、そんな感じかな？大変だったけど、かなりいい経験をさせてもらってきたよ」

護「・・・ボクもそんな体験してみたいなぁ」

ジン「けど・・・ジャングルではみょうな病気にかかって死にかかったり、原住民族に捕らえられて丸焼きにされかけたり・・・鉱脈探しじゃ5，6回は閉じ込められた（笑）」

護「わ、笑えないですよっ！」

ジン「ま、今思い返せば全部いい思い出だよ」

護「ジンさん・・・すごい人です・・・それでは、今回もこのくらいで、さようなら！」

ジン「また今度っ！」

第五話：まだまだ途中・・・（前書き）

ふぅ・・・何だか書くのに疲れてきたぜ（早）
それでも一応がんばりまぁす・・・だから元気を分けてくれぃっ！
（何様だ）
と言うことで、今回も始まり始まり・・・

第五話：まだまだ途中・・・

予定通り昼ごろにルウェル港にたどり着いた。さすがこの国の入り口とあって、かなり賑やかだ。
「じゃあ、まずは何処へ寄る？」
「・・・手当たり次第にまわってもいいですか？？」
その言葉通り、二人は旅に必要なものを手当たり次第回って、買い揃えていった。
「ふむふむ・・・しめて１万マニーだなぁ」
『マニー』とは、この世界での共通通貨である。ジンは何処からともなく取り出したそろばんを弾いていた。世の中やはりお金なのだと少しがっかりした。
「・・・世の中こんなものさ」
ジンも少しくたびれたようだ。さすがに両手にいっぱいの手荷物を長い間持たされてたら誰だって疲れる。
「じ、ジンさん・・・そ、そこで休憩しませんか？」
「そ、そうだねぇ・・・」
二人は近くの噴水のほとりに腰を掛けた。
「いやぁ・・・なかなか大変なものだねぇ・・・」
「はいぃ・・・」
しばらくの間、ボーっとした。そして、空が夕焼けに染まる頃、正気を取り戻した。
「・・・はっ！船がぁっ！！！」
一足早く正気に戻ったジンが叫んだ。
「あぁ！！！こんなところでボーってしてるんじゃなかった！！」
しかし、さすが先輩。新米のアルとは違いすぐに元に戻った。
「そうだ、夜の便があるかもしれない・・・急ごう！」
未だパニック状態のアルと、手荷物を掲げ波止場までダッシュした。
「もうすぐトラッシュ島行きの船が出発いたしまぁ～す」

ジンたちがついた頃にはもう出発していて、5，6メートル陸から離れていた。
「おじさん！これ二人分のお金！じゃあ・・・・・・おぉりゃぁ！！！！」
助走をつけて、いつものジンからは考えられないような掛け声とともに大ジャンプ。着地先は・・・ぎりぎり船の上だった。
「ひぃ、ひぃ・・・」
ただ、アルはぶら下がっていた。辛うじてジンの手に捕まっている。
「ふぅ・・・あぁ、悪いね」
そう言ってようやく引き上げられるアル。息も絶え絶えだ。
「お客様、ようこそおいでなされました。お二人様のお部屋までご案内いたします」
優しそうな船員さんは何事もなかったように二人の荷物を運んでいった。
「わぁ、結構広いんですね」
船員が部屋を出てからのアルの第一声はそれだった。
「あぁ、相部屋だからこんなものかな？」
「へぇ・・・ボク、船に乗るの初めてなんです」
はしゃぐアルの横でジンは荷物を寄せていた。
「そうか・・・ってことはアル君はあの町から出たことなかったり？」
「いえ、隣町くらいは行ったことあるんですけど・・・それより向こうはなかったりします」
少し照れた感じでアルは言う。それを見てジンは優しく言った。
「そうかぁ、アルにとってはじめての事ばかりなのかぁ・・・」
二人は互いに笑顔で見つめあった。アルも自分の荷物を端へ避ける。
「さてと・・・もうすぐ夕食だし、ご飯食べてから自由行動にしようか」
アルはそれに賛成した。じきに夕食が運ばれ、ジンはゆっくり、アルはせっせと食べ始めた。早く食べ終わったアルは部屋を飛び出し

た。
「あ、あんまり遅くならないようにするんだよ」
何だか母親のような言い草に、アルは少し懐かしさを感じた。

第五話：まだまだ途中・・・（後書き）

さぁて、いかがだったでしょうか。
え？『いつも通りつまらなかった？』・・・そんなものでしょう。
でわ・・・
今回は少し疲れたので作者と対面コーナー（？）を休ませてもらいます。
んじゃあまたぁ～。

第六話：月夜・・・（前書き）

いやぁ～・・・久しぶりですね。
ま、たらたら書くのも面倒なのでどうぞ・・・。

第六話：月夜・・・

甲板には小柄な二人組の客が佇んでいた。夜空に少し欠けた満月があり、辺りをその光が照らしていた。
「こんばんわぁ・・・」
恐る恐る声をかけてみると、二人組は振り返った。二人とも同じマントを羽織っていたが、一人は、何故か綺麗な顔立ちだが、不機嫌そうだ。体は小さいが妙に威圧感がある。もう一人はさらに体が小さく、ニコニコ童顔だ。
「こんばんは」
優しそうな方は答えたが、もう一人は答えなかった。
「今晩もいい月ですねぇ・・・」
「そうですね・・・あなたもトラッシュ島へ？」
どうやらこっちの人は友好的そうだ。
「はい！仕事でトラッシュタウンの清掃活動の手伝いを」
「ふむふむ・・・もしかして、『暁』の方ですか？」
アルは大きく頷いた。
「そうなんですかぁ・・・実は・・・」
「アリオン！」
不機嫌そうな方がその先を言わさないよう遮った。
「あ・・・はい、ごめんなさい」
「・・・先に戻っておく」
彼はそう言い残し、去ってしまった。その後姿を見ながらアリオンは言った。
「・・・すみませんねぇ、あの人今日はちょっとご機嫌斜めで・・・いつもはいい人なんですけどね」
「ううん、少しびっくりしたけど・・・君、アリオンって言うんだ」
くるりと、振り返り笑顔で自己紹介を始めた。
「はいっ！ぼくはアリオン、アリオン・メイルといいます」

「ボクはアル・フリーウェル、これからよろしくっ！」
二人は握手を交わした。
「あ、ついでにさっきの人はリュート・クレウム。かなり剣術上手いんですよぉ」
「ふぅん・・・確かにすごい威圧感あったね」
「あ・・・あれは不機嫌だったからだと・・・」
二人は苦笑いをした。
「・・・どうして不機嫌だったのかなぁ？」
「ん～・・・たぶんトラッシュ島へ行くのがイヤなんだと・・・」
「ははは・・・ホントに評判悪いね、トラッシュ島って」
うんうん、とアリオンは頷いた。
「まぁ・・・こっちも上の人からのお仕事なんで仕方ないんですけどね」
二人は笑った。どうやらアリオンも似たような職業らしい。それから二人は、夜空を見上げたり他愛もない話をして時間を費やしていった。別に特別なことでもなかったが、お互いに気があった。
「はぁ・・・明日には着くんだね」
「はい、明日の朝に着くみたいです・・・」
二人は夜空にたったひとりで輝いている月を、寝転びながら眺めていた。
「またこうやって話できるといいなぁ・・・」
「そうですね・・・楽しかったです」
そう言ってアリオンは立ち上がった。
「それじゃあ、ぼくもそろそろもどらせてもらいますね」
「うん、そろそろボクも寝なくちゃ・・・ありがとう」
最後の一言にアリオンは首をかしげた。
「『ありがとう』？」
「・・・変かな？楽しく過ごせたお礼のつもりだったんだけど」
すぐに笑顔のアリオンに戻った（さっきからずっと笑顔だったが）。
「いえ、普通にしていただけなのにお礼を言われたので・・・それ

じゃあ、また明日！」
手を振り、アリオンは向こうへ行ってしまった。
「ただいまぁ・・・」
返事はなかった。ジンはすやすやと眠っている。アルもこれ以上起きてる必要もなかったのですぐさまベッドに体を沈めた。
『今日は長かったなぁ・・・けど、かなり楽しかったぁ。このままこんな日が続けばいいのに・・・』

第六話：月夜・・・（後書き）

はぁ～・・・。ネタはいっぱいあるのに、ＰＣの前に座るとやる気０に・・。・（つД｡）・・。・モウダメポ

まぁ、今日もこんな感じで終わりますねぇ～

ではっ

☆（＊^ー。）ノ～♪ｓｅｅ　ｙｏｕ　ａｇａｉｎ♪～ゞ（。ー^＊）（☆

第七話：奇襲！（前書き）

お久しぶりでぇ～っす！！！（汗
久しぶりすぎて最終更新いつだったか忘れちまいました（滝汗）
ま、まぁ・・・いろいろあったんですよ（ぉ
死に掛けたり、大会で惜敗したり・・・ま、そんなこんなで更新ですっ（苦笑

第七話：奇襲！

ようやく日の出が見えてきた頃、アルはまだ眠っていた。しかし、辺りが騒がしいのに気がつき目をそっと開けてみた。
「えええええ?!」
部屋がめちゃくちゃになり、ドアがブチ破られていた。
「え・・・あ・・・」
固まっていると、剣をもった明らかにいつもと感じが違うジンが出てきた。
「アル!!!ここから出るぞっ!」
まったく状況が飲み込めていなかったが、ただ頷いて荷物を背負った。ジンは辺りに敵が出てこないかどうか確認していた。
「説明は後だ、急ぐぞ!」
アルは黙ってジンの後ろについていったが、とたんに悲鳴じみた声を上げた。至る所に機械で作られたような腕や翼の生えた胴体が転がっていた。
「わわわ・・・」
「急ごう、いつ襲われてもおかしくない」
「は、はいっ」
二人は走り、ようやく甲板にたどりついた。するとそこは戦場と化していた。無数の羽の生えた狼型のロボットの残骸が散らばり、そこで昨日出逢った二人が戦っている。数から見て、こちらのほうが圧倒的に不利だ。
「ん〜・・・これって危なくないですか?」
この危機的状況にもアリオンは笑顔だ。両手に銃を持ち、舞うように敵を打ち抜いている。
「ふん・・・じゃあ逃げるか?」
リュートは笑顔ではないもののかなり余裕な感じだ。鬼の如く敵を切り刻んでゆく。

「数・・・多すぎません？」
あたかもいつものような感じでふたりは会話をしている。
「ジ、ジンさん、どうしましょう・・・」
慌てふためくアルを尻目に、ジンは二人の援護に向かった。それによってアルはさらに混乱した。
「あわわわわ・・・」
「おはようございますッ・・・アルさんもこっちに来ませんか？」
『顔とやってることが不釣合いすぎる！』
顔を引きつらせながらそう思い、首を大きく横に振った。
「そうですかぁ・・・どうします？」
「・・・知らん、死なない程度に逃げておけ」
と言うリュートの命令で、アルは仕方なく（？）逃げることとなった。敵は三人と同様、アルにも襲い掛かり始める。
「ひっ！・・・ほっ！」
妙な声を上げつつ、ギリギリのところで攻撃をかわす。
「ぶ、武器・・・！！！」
避けつつも武器を探す。走ってもなかなか武器は見つからない。その間にも狼はアルを執拗に追いかけてきた。
「はぁ・・・はぁ・・・」
あまり体力に自信のないアルは緊張のせいもあって早くも息切れし始めた。狼はアルのすぐ後ろまで来ている。
「ひぃ・・ひぃ・・・うわぁっ！」
狼の屍（？）に躓いてしまい万事休す。アルはうつ伏せに倒れ、それに覆いかぶさるように狼は襲いかかった。
「ウォーン！」
『・・・こんなところで・・・こんなところでぇ・・・っ！！！』
必死の思いで、右手で狼を払いのけようとした。
ブチブチブチッ――――
確かにそんな音が聞こえた。その後に海に何かが落ちる音。そっと目を開けると右手には今まで見たこともない変わった形の剣が。海

のほうに顔を向けると体が切断された狼が沈みかけている。
「・・・？」
危険な状況にもかかわらずアルは考えた。
『・・・この剣、どうしたんだろう』
何にせよラッキーなことに違いない、そう考えがたどり着きジン達がいるところまで戻りにいった。

第七話：奇襲！（後書き）

・・・づがれだぁっ！！！（ぇ
まぁ、今までの苦労をこの人と話そうじゃありませんか！？
護「じゃ～、今回のゲストです？！」
アネル「・・・ちょっと」
護「は、はい？」
アネル「私のこと呼ぶ前に名前図鑑調べたんでしょ」（事実です）
護「・・・へ？そそそそそ、そんなことしてませんよぉ（汗）」
アネル「じぃ～・・・フンッ！」すたすたすた・・・
護「なにぃ？！今番組（？）初のゲスト逃亡？！」
アネル「・・・バカ・・・そんなことするわけないのに・・・」てくてくてく・・・
護「ふぅ・・・よかったよかった（泣）」
アネル「ばっ、ばかぁっ！…な、泣かないでよねっ」
護「は、はいぃ」
アネル「・・・で、今回はどんな話？」
護「え、あ、そうだった・・・今回は僕の今までの苦労話を・・・」
アネル「夏休みなのに苦労話？？？」
護「ま、まぁ・・・いろいろあるんですよ」
アネル「そう・・・で、どんな話・・・」
護「あっ！！！もうこんな時間になってしまいました！」
アネル「えぇ？！な、何なの一体？！！！」
護「すみませぇ～ん、また今度っ！」
・・・
・・・
・・・
・・・
アネル「まぁ～～～～もぉ～～～～るぅ～～～～！！！！」

注：名前図鑑→作者が作っているＰＣにあるキャラ図鑑。いろいろあるかも・・・

第八話：妙なやつ・・・？（前書き）

さてさて、今回もまた～り更新です！
ではでは・・・

第八話：妙なやつ・・・？

「ふん・・・どうした、それがあんた達の実力か？」
二人に加勢したものの、どうもジンは遅れをとっている。
「最近あまり戦ってないからなぁ・・・腕が鈍ったよ・・・それより」
そう言ってジンの一点を指差した。
「あいつ・・・どうするつもりだ？」
そこにはそりのような物に乗った人（？）がいた。
「ん～・・・どうします？」
「一発撃ってみろ」
はいは～い、と笑顔で答えてアリオンはそいつに銃口を向ける。
バン！と、いう銃声と共にとてつもない速さで弾は飛んでいった。
「あれ・・・？おっかしいなぁ」
弾は確かにあいつの額には入ったはずだが、まったくといっていい程あちらは微動だにしていない。
「・・・！来るぞ！！」
そりを操ってそいつは降りてきた。上半身は裸で、筋骨隆々の言葉そのもののような男だ。
「てめぇ、このボルト様に向かって撃ってきやがったなぁ？！」
右手に弾丸を握り締めていた。額はまったくと言っていいほど無傷。狼といい、こいつらは只者じゃない。
「ははは・・・痛くなかったんですか？」
「バカ野郎！この程度で『痛い痛い』言ってられっかぁっ！」
かなり強気なやつだ。
「ふぅん・・・けど、どうしてこんなことを？」
「そりゃあおめぇ・・・プラ様の命令で定期便を襲撃しろと・・・あ、言っちゃいけねぇンだ」
口を滑らしてしまい頭をボリボリとかいた。機械なのに頭は悪いよ

うだ。
「・・・まぁ、てめえらが消えてくれればそれでいいってことだ！」
拳同士を思い切りぶつけた。戦うつもりだろう、三人も身構えた。
「うらあああああ！！！！」
物凄い声と共にジンの前に飛び出した。体からは考えられないスピードだ。さらにそこからアッパーを仕掛ける。
「ぐぅっ・・・！」
防いだつもりだが力負けでジンは高く飛ばされた。
「おらおらおらぁ！！！！」
次はアリオンに向き直り突進する。一方、アリオンは飛び上がり銃を乱射する。
「ふん！そんなおもちゃで何ができるってんだぁっ！！」
と、飛び上がりアリオンの頭上まで来たところで拳を振り下ろした。華奢な体のアリオンは、なすすべもなく地面に叩きつけられる。
「う・・・っ！！」
思い切り叩きつけられて声も出ない。ボルトはようやく降りて、今度はリュートに向き直る。
「・・・後はお前だけだぜぇ？」
「ふん・・・・戦いの最中に余所見とは随分余裕のようだな」
リュートが指した方向に振り向いた時には遅かった。
「うごぉっ・・・！！！」
「この程度でやられるほど弱くはないよ」
ジンの剣が深々と突き刺さっていた。そのまま右になぎ払い傷口を広げる。そこからは血は出ずにコードが数本出てきた。アリオンもふらふら立ち上がった。どうやら無事らしい。
「て、てめぇっ！！！」
殴りにかかったものの不発に終わってしまった。
「ちっ・・・少しは出来るじゃねぇか」
「いやぁ、でも痛かったですよ？」
頭をさすってはいるが、アリオンの顔には笑顔があった。さすがに

頭が悪いボルトでも不利なのがわかった。
「・・・ここは引かさせてもらうぜ」
口笛でそりを呼び戻し、颯爽とそりに乗り込んだ。
「次に会えるのを楽しみにしているぜ！」
「あ、何処にいるんですか？」
「トラッシュキャッスル！」
そういい残し、彼は手下と共に去っていった。

第八話：妙なやつ・・・？（後書き）

さてさて、今回も始まるかも・・・？蛇足こぉ～なぁ～（ぁ
護「ただいま現場（？）はアネルさんによって占拠されております・・・（汗）」
アネル「んん？！」
護「ひぎぃっ・・・い、命だけはぁッ」
アネル「な、何怖がってんのよ。別に取って喰おうって訳じゃないのに・・・」
アネル（こくり）
護「ほっ・・・」
アネル「・・・今回はボスっぽいのが出てきてるけど・・・弱いじゃないの」
護「え？・・・あ、それはですねぇ・・・ま、お互い小手調べってことで」（滝汗）
アネル「えぇ～？技の一つも出してないのに？？」
護（こくこく）
アネル「そっか、じゃあトラッシュキャッスルで決戦が・・・」
護「わー！！！！わー！！！！！！！！！」
アネル「なっ、何よ？！」
護「わぁーーーー！！！！！・・・って、そんな事いっちゃダメじゃないですかっ！（怒）」
アネル「あははは・・・ま、未遂だからいいじゃん（笑）」
護「はぁ・・・ま、いいっか。そろそろお開きにしましょうかぁ」
アネル「あ、了解・・・？」
護「？」
アネル「わ、私のキャラが変・・・」
護「え？・・・ま、作者にもいろいろあるのさ、はははは（冷や汗）」
アネル「・・・もぅ」

護「ま、今回の題名も『妙なやつ』ですし（笑）」
アネル「な、なんですとぉ！！！（怒）」

第九話：脱出・・・？（前書き）

どぞ～♪

第九話：脱出・・・？

「は、はぁ・・・ただいま。終わっちゃった？」
うんうん、とジンとアリオンは頷いた。それを見てうなだれるアル。
「・・・まぁ、無事でよかったですよ」
「そうだね・・・あいつ結構強かったし・・・ところで、武器は？」
見たところアルは丸腰である。彼自身も不思議そうな顔をする。
「あれぇ・・・さっきまで持ってたはずなんだけど・・・ま、いいっか」
案外（？）単純なので、あまりそういうところにアルはこだわらない。
「ま・・・いいですかぁ」
「・・・ところで」
さっきからうろうろしていたリュートがようやく口を開いた。
「これからどうやって島まで行くつもりだ？」
「いやだなぁ・・・この船に決まってるじゃないですかぁ」
いつものニコニコ顔を見せるアリオンだが、リュートの指差す方向を見て、笑顔のまま固まってしまった。
「あちゃ～・・・マストが折れちゃってる」
「あらら・・・どうしよう？」
いろいろ模索した結果、とんでもない策が思いついた。
「・・・うまくいくのか？」
落ち着いた顔をしているが、声は不安そうなリュート。全員小船に乗り換えたのを見てにっこり笑うアリオン。
「ん～・・・どうでしょう？やれるだけやってみますね」
そう言い、ポケットから銃を取り出す。銃口を島と逆方向に向け呟くように呪文を唱え始めた。
「行きますよぉっ！！！とりゃあっ！！」
掛け声とともに銃口から水が勢いよく噴射してきた。その反動で小

船が徐々に動き始める。
「・・・もう少し早く出来ないか？」
「は、はい・・・はあぁぁ！！！」
気合を入れてさらに水の量が増えた。勢いよく船が島に向かって動き出す。
「おぉ！！！すごい！」
一番前のアルは気持ちいい様子。しかしジンはあまり顔色はよろしくなかった。
「ぅ～・・・」
ジンが低く唸りながら船底へと沈んでいく。それを見てアルは背中をさする。さっきまでのかっこよさは何処へやら。
「これだとすぐに島へ着きそうですね！」
アルは大声を上げた。確かに島はもうすぐだ。小船は波に飲まれながらも強く突き進んでいく。
「・・・も、もうだめです・・・」
ようやくたどり着いた頃には、アリオンはへろへろだった。それを黙ってリュートが背負い、アルは陣の背中をさすっていた。
「ぅ～・・・」
「ジンさん・・・まだしんどいですか？」
ぐったりとするジン、船は嫌いなようだ。
「・・・俺たちは先に行っておくぞ」
そういい残し、リュート達は行ってしまう。すれ違いに青年がこちらに来た。
「あんた達・・・どうやってきたんだ？」
「え、えぇっと・・・船できました」
「もしかして・・・ギルドの人か？」
「そ、そうですけど・・・」
いまさら思い出したが、遊びに来たわけではない。仕事に来たのだ。
「そうか・・・そっちの人もか？」
「はい、けど船酔いがひどくて・・・」

「・・・町長のところまで運んでやるよ」
どうやら悪い人ではないらしい。お言葉に甘えて担ぐのを手伝ってもらった。
「・・・何だか寂しいですね」
「そうだな・・・あいつらが来てからこんなになっちまった」
「もしかして・・・機械の？」
青年は驚いたような顔をした。
「お前あいつらの事知ってるのか？！」
「え、えぇ・・・船に乗ってたら襲われちゃって」
「そうか・・・なら急がねぇと！」
どうやらかなり急いでるらしい。アル達の事などお構いなしに走り出そうとした。
「ちょ、ちょっと！」
「急ぐぞ！」
三人は港の中心に向かって走り出した。

第九話：脱出・・・？（後書き）

護「いやぁ、何か月日の流れって早いもんですなぁ・・・」
アル「そうですねぇ・・・５ヶ月たってようやく１０話ですかぁ」
護「まぁ・・・趣味でやってるからね」
アル「え？！・・・皆さんそういう方が多いと思いますが・・・」
護「さぁ・・・ま、月一更新でもいいかなぁって思うよ」
アル「？！！・・・そんなんでいいんですか？？？」
護「まぁ・・・そんなに期待してる人いないと思うし、『最低でも月一更新』だからその時の気分によるね」
アル「そんなぁ・・・」
護「しょうがないじゃないですかぁ・・・ヒロインなかなか出せないし、疲れてるし、いろいろこっちだってあるんですよ」
アル「・・・仕方ないですね」（泣）
護「申し訳ない・・・」（泣）

第十話：決断・・・？

「あ、あの」
なにやら妙な雰囲気を感じ取ったのか、アルは恐る恐る聞いてみた。
しかし、
「話は後！」
と、あっさり断られる。それでも話しかけたが彼は振り向きもしなかった。そんなこんなでようやく大きな建物の前にたどり着いた。
「ここは？」
「ここは、この島の最終防衛戦線の拠点だ」
・・・えらく核心を突いてくれたものの、ほとんど訳がわからない。それを察したように青年は付け足す。
「あぁ、役場だ役場・・・ともかく町長が待っている、行くぞ」
これでわかったものの妙な不安が残る。中は何故か無数の机がバリケードのように置かれている。
「町長は二階にいる、ついて来るんだ」
言われるがままについていくアル達。二階に上ると町長室へ案内された。
「あっ！アリオン！！」
振り向いた少年は確かにアリオンだった。その傍らにはリュートもいる。
「大丈夫？？」
「はい、まだふらふらしますが・・・大丈夫です」
いつもと変わらぬ笑顔で答えた。それを見てほっと胸を撫で下ろす。
「ん・・・ん～」
「ジンさん！」
背中に担いでいたジンのことをすっかり忘れていた。彼をそっと床に降ろす。
「ん～・・・すまない、迷惑をかけてしまったね」

「いえいえ！お役に立ててよかったです」
「・・・そろそろよろしいかな？」
部屋の窓の辺りから声が聞こえた。さっきまでの他愛ない会話で全く気付かなかったが、そこには白髪混じりの初老の男性が立っていた。
「すみません、それでは僕たちはこれで」
リュートが落ち着いた口調で言い、一礼をしてアリオンと共にその場を後にする。
「はて・・・君たちは？」
「あ・・・あのっ、そ、町の掃除の仕事を・・・」
いきなりの質問に返事が出せなかった。男性は少しの間考えた後、思い出したように掌を打つ。
「あぁ、それですかぁ・・・」
何故か申し訳なさそうだ。にこやかな顔を曇らせて、町長は言った。
「あなた方もお気づきかもしれませんが・・・この町は今大変なことになっているんです」
「機械・・・のことですか？」
いつの間にか起き上がったジンが会話に加わる。
「あなた方も？！・・・でしたら話がしやすい。ご存知のように、このトラッシュ島はほとんどをロボットたちに占拠されてしまっています、残るはこの港だけ・・・ぜひとも島をロボットたちの手から救っていただきたい・・・」
彼の言いたいことはわかった。しなければこの島、もしかすると国まで危ないことになるかもしれない。しかし、今のアルの実力では到底達成できそうにない。アルは小さく深呼吸してからありのままを伝えようとした。
そのとたん、町中に警鐘が鳴り響いた。
「またか・・・イノ！」
「わかった！」
イノと呼ばれた青年は、駆け出した。

「ぼ、僕も行きます！・・・やれるかどうかわからないけど」
さっきまでの考えとは逆の言葉が出た。
「そうだね、どっちにしても解決しなきゃ帰れなさそうだし・・・」
町長は少し考えたのち、首を縦に振った。
「人は多いほうがありがたいです、それではイノ、彼らと一緒に行きなさい」
三人は町長に一礼すると、事件の起こった方へ走り出した。

第十話：決断・・・？（後書き）

久々ですね・・・・（汗

いろいろと浮気してました。けど、そろそろちょくちょく（？）書き始めようかなぁ～と、思ってますので・・・期待せずにお待ちくださいね（おぃ

目指せ第一部完結！（お

第十三話：多勢に無勢…？（前書き）

栄えある（？）十三話です！今回は何故か長めです～

第十三話：多勢に無勢…？

走っている間に、イノは島の状況を説明した。それは、機械の暴走は一ヶ月前から始まったことや、その機械を作った人の名が『テラ・クレウス』と言うことなど、様々だった。
「う～…そんなに沢山言われても…」
「そう言う時は、メモするのが一番いいんだなあ」
ジンが先輩らしい（？）アドバイスでフォロー。すかさずアルは懐から取り出した手帳とペンでメモを始めた。
「あの～質問いいですか？」
「どうした？」
「テラさんは、今どこにいるんですか？」
「あいつは、さっき行った役所の地下牢に容れられてる。一応犯罪者だからな」
その時イノは何となく寂しそうだった。
「ふむふむ…」
一通りメモをとり終わった後、アルは考え始めた。
「ジンさん、やっぱりテラって人に会うべきですよね？」
「うん、それが妥当だね。イノ君、会えるかな？」
イノは困ったように首を傾げた。
「会えるけど、多分話できない」
「どうしてですか？」
「ちょっとな…錯乱状態みたいで、ずっと譫言ばかり言ってる」
アルとジンはお互いを見て肩を竦めた。原因が掴めないと、対処できない。そうこうしていると目的地の北門にたどり着いた。
「こりゃ酷いぞ…」
辺りには、狼型の機械の残骸が散らばっている。その先では、二人の少年が戦っている。
「…ところで、アル。武器はどうするのかな？」

あっ、と口を開け慌てるアルにジンは指示した。
「私とイノで、彼等に加勢してくるから、アルは適当に武器を拾って、街の中にいる生き残りをかたずけること！」
「は、はい！！」
そう言って飛び出すアル。それを見届け、ジンは向き直った。
「あんたも大変だな」
「いやいや、なかなか楽しいものだよ、新人君は限りない可能性を秘めてるからね…そろそろ行きますか！」
走り出すジンにつられて、イノも戦場に駆け出した。
「武器、武器…」
走りながら、アルはそればかり口ずさんでいた。が、木の枝すら見つからない。
『さっきの武器ってどうすれば…』
『そう言えば、さっきは危なくなった時に…』
などと考えてると、悲鳴が道の先から聞こえた。反射的にアルは走り出す。しかし、少し走っただけで息が上がってしまった。たどり着いたときには、へたり込んでしまいそうだった。
「いやぁ～！」
声の主は小さな女の子だった。アルに向かって助けを求めたが、その彼は戦う前から戦闘不能状態。顔を上げるのが精一杯だった。
「あ……」
その瞬間、彼は言葉を失った。数匹の狼に囲まれている少女が、アルの眼には『あの人』にしか見えなかったのだ。
「シェイル！！！」
次の瞬間、信じられない速さでアルは少女の側に駆け出した。そして彼の手には例の剣が。「お、お兄ちゃん・・・」
突然の加勢に狼達は驚いたが、すぐに体制を立て直して二人を囲んだ。
「よっと…しっかり捕まってて！！」
アルは少女を抱えて、一目散に北門に向かって走り出した。

「きゃぁっ！」
すかさず狼が襲い掛かるが、一瞬で真っ二つに斬られてしまった。
「……まだまだだね」
狼の残骸を見て、アルは鼻で笑った。そして再び走り始める。狼達も後を追うが、攻撃はせずただ二人を囲むようにした。
「あれ…？」
最初は狼の数も少なかったが、門に近付くにして数が増えてきた。
「結構しつこいなぁ…」
北門に近づくにつれて、四人の姿がはっきりと見えてきた。
「お、お兄ちゃん…」
脇に抱えていた女の子は震えていた。
「ん？大丈夫だよ」
いつものアルでは一生聞けなさそうな戦闘での余裕の言葉。しかし、一番驚くのが、彼自身だとその時は誰も知らない。
「…これじゃあ、きりがないな」
リュートが呟いた。
「そうですねぇ…ちょっとヤバイかも…」
と、アリオン。「無理はするな。お前の分も片付けてやる」
「そんな～…先輩に申し訳ないですよ」
…まったく。ピンチのはずなのにどうしてここまで余裕なのか。一方ジンとイノは…。「いつもこんなにやってくるの？」
ジンからは、まだまだ余裕が感じられる。
「……」
身の丈以上の槍をぶんぶん振り回しているが、喋る余裕はないようだ。
「いやぁ、今日もいい天気だねぇ」
構わず喋り続けるジン。ともかく喋っていたいようだ。何となく賑やかな四人（三人？）だが、敵の数は一向に減る気配がない。
「これじゃ全くきりがないな…あんたら何かいい方法はないのか！？」

必死に戦っていたイノが、ようやく口を開いた。
「魔法が使えるなら簡単なんだけどねぇ…生憎私はそれほど得意じゃないんだ」
と、ジン。
「俺もだ…」
「ぼくは…さっきのやつで力が…すみません」「そういえば…」
イノが再び口を開く。
「あの新米は？」
「残念だけど…彼には無理だと思う。戦いにおいて素人だからね」
残念そうに（？）ジンは告げた。
「全く…使えない奴だ」
「これから大変ですねぇ…大丈夫かな？」
などといろいろ言われてるアル。…と言うより、戦闘中にここまで喋れる人はそうそういない。
「あ…あいつ、来た…しかも結構な数連れて…」
「よかった…武器は持ってきたみたいだね…」
四人は、アルの変化に未だ気付いていなかった。
「くっ…しつこいな、こうなったら」
アルは空高く跳び上がった。それを追うようにして周りの狼も跳び上がる。近づく狼に少女は再び悲鳴を上げた。
「邪魔だぁ！！！！」
アルは空かさず回転りを放ち、さらに高くジャンプする。そして、剣を空に向けて掲げ、何かを唱え始めた。
『天より来りし雷鳴の力、この剣に宿し、彼の者を打ち砕かん』
「行くぞ！『サンダーソード』！！！」
一瞬にしてアルの剣にカミナリが落ち、バチバチと恐ろしい音を上げながら雷の力が宿った。それを地面に向けて勢いよく投げ付けた。
「やばい！飛び上がれ！！」
四人は間一髪でアルの一撃をよけた。が、狼の軍勢は、避けることが出来ず、更に弱点の電気により次々と倒れていった。

「ふう…やっと片付いた…大丈夫だった？」
「う、うん…お兄ちゃん強いね」
「守りたい人のためには頑張らないとね…そろそろ戻らないと」
ようやく地上に戻ったアルと少女。しかし、アルの様子がどうもおかしい。
「アル……凄いね！まさか魔法が使えるなんて…」
ジンはアルの両手を握り、振り回した。
「え…？僕が魔法？」アルは、いつもの、どこか腑抜けたような顔をした。
「まさかぁ…僕が…そんな事出来るわけ…」
彼の体がぐらついた。そして、そのまま地面に突っ伏してしまった。
「アル！…アル？！」
ジンが揺するものの、全く動かない。すると、イノが提案した。
「まず、役場に戻ろう。そいつの事もあるし、町長にこの事を説明しなきゃならない」

第十三話：多勢に無勢…？（後書き）

ここまで読んでくださってお疲れ様です！&ありがとうございます！！これからも頑張るつもりですが、もしかしたら新しいものも書いていくかも…いろいろネタが浮かんできて…ウズウズしてます。もしよかったらそちらの方も読んでみていただけると幸いです（笑）それではっ！！

第十二話：命の恩人（前書き）

久しぶりすぎる更新…いろいろすみません。現を抜かしてました。けど、とても視野が広がったような…これからも、自分のペースでがんばります！はぅ～！（オチツケ）

第十二話：命の恩人

目が覚めたのに、目が見えない。
真っ暗闇だと気付かず、アルはあたふたしていた。
やがて、目が見えないのは暗闇の為だと分かり安心した。そうこうしていると、暗闇にも徐々に慣れて、自分がどこにいるのか大体わかってきた。特に何の変哲もない質素な部屋。感じからすると、昼に来た役所かもしれない。…ところで、自分はどれくらい眠っていたのだろうか。それより、何故知らないうちにこんな所へ…？『確か、女の子を助けようとして…』
そこで記憶が途切れた。その後、自分が起死回生の一撃を放ったことなど知るよしもない。
「入るよ～」
言うよりも早く、その声の主は入ってきた。ジンだった。
「あ…アル、大丈夫かな？？」
「は、はい…」「そっかぁ、それはよかったよ」
ジンは笑顔で答える。
「けど…びっくりしたなぁ…まさか、アルが魔法を使えたなんて。しかもかなり高度な…」
「へ…？」
もちろん、本人は知らない。しかし、ジンは続ける。
「危ないよ？自分の力を越えた魔法を使うなんて…まあ、そのお陰でみんな助かったんだけど…」
アルはまだまだ分からないものの、褒められていることだけは理解できた。「あははは…」
とりあえず、笑うしかなかった。ともかく、自分にはすごい力がある…そういう風に考えた。…しかし、それが一体何故？どのようにして？など、様々な問題が山積みだ。
「まだ、どこか痛いところあるかな？」

我に帰ると、ジンが目の前にいて、思わずのけ反った。
「だ、大丈夫です…」
「そか…ならよかった。じゃ、もう寝たほうがいいね…明日からまた頑張ってもらわないと」
そう言い残し、ジンは部屋を出た。その背中にアルはおやすみなさいを言ったが、聞こえなかったようだ。
「ふぅ…」
ジンがいなくなり、急に部屋が静まりかえった。さっきまで寝ていたし、さっきの話ですっかり目が覚めてしまった。「散歩…しようかな…」
ベッドの上で寝転ぶよりはそっちの方が気分も晴れる。そういう事で、ランタン持って、こっそりと部屋を抜け出した。別にこそこそする必要など全くないが、何故かそうしてしまう。抜き足、差し足、忍び足…。
建物は二階が客人の部屋と、町長室。一階は物が散らばっているばかりだった。そして地下室…。
「たしか、誰か捕まってたっけ…」
暇潰しに、どんな人か見てみようと立ち寄った。ランタンを掲げてみても、地下室はまだ暗かった。
「こ～んば～んは～」
もちろん返事はない。ただ、人の気配は感じられる。
「誰か～、いますかぁ？」
呼ぶと、小さな悲鳴が聞こえた。声の方に近づこうとするが、すぐに鉄の柵にぶつかってしまった。「いたたた…」
ぶつけた頭を撫でながら、もう一度読んでみた。
「いませんかぁ～…え～っと、テラさんでしたっけ？」
「い、いやぁ～…」
弱々しい声が返ってきた。なぜか怯えているようだ。
「大丈夫？…悪いことしに来たわけじゃないから」
「ちがう…ちがうよぉ…ウチがやったんやない…」

やたら方言（関西）が入ったイントネーションだ。アルはどうすればよいかわからない。
「ぁ…ん～…どうしたの？」
「ちがう…ウチやない…」
まるでうわのそらのように声の主は繰り返す。「大丈夫だよ、テラさん。ここにはあなたと僕しかいないから」
「ぅ～……」
両者一歩も譲らず。困ったアルは最後の一手に出るため一度牢屋を出た。
「テラさ～ん、食べ物ですよ～」
テラは大きなパンを手に戻ってきた。
「パンですよぉ～…る～るるる…」
効果てきめん。テラは恐る恐るながらも、アルの方に向かってやってきた。
「どうぞ～」
パンを渡すと、アルを全く気にせずガツガツ食べ始めた。彼女はひどく汚れていて、ツインテールに結った赤い髪は埃や汗で黒みがかっている。その、あまりにも可哀相な姿をみて、思わず頭に手を延ばした。『わしゃわしゃ…』
触れた瞬間、身体がびくっと震えたものの悪意がないとわかったのか大人しく頭をアルの手に委ねた。もちろんパンを頬張りながら。
しばらくそうしていると、テラはパンを食べ終わり一息着いていた。
「…どうでした？おいしかったですか？」
「……ありがとぅ」
こくりと頷き、そう呟いた。それをみてアルは笑顔になる。
「あんさんは命の恩人やぁ…」
頭を撫でていた手を見つめながら言う。
「あはは……もう大丈夫かな？」
また、こくりと頷く。それをみてアルは頭を撫でていた手をそっと離した。

「あっ…」と名残惜しそうにするが、もちろん鈍感な彼は気付かない。
「よかった…それじゃあもう行くね」
離れていくアルに何かを言いたかったが、思い付かない。階段まできてアルが先に声を掛けた。
「またあした！」
階段を上っていく命の恩人に、小さく呟いた。
「またあした…」

第十二話：命の恩人（後書き）

お疲れ様でした。まあ、次回更新がわからないので気長にお待ちくださいねぇ～…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2169c/

キミの微笑とボクの憂鬱

2010年10月14日23時53分発行